

國學院大學学術情報リポジトリ

『日本国語大辞典』不載語彙：
『新編国歌大観』本文から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田, 勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000944

『日本国語大辞典』不載語彙 ―『新編国歌大観』本文から―

小田 勝

キーワード・和歌 語彙 語史 日本国語大辞典 新編国

歌大観

○ はじめに

古典文を読んでいると、『日本国語大辞典「第二版」』（以下『日国』と略称）不載の語彙に出会うことがしばしばある。前稿（注1）では、中世王朝物語中の十一作品から『日国』不載語彙を例示し、参考に供した（注2）。本稿は、前稿に引き続き、『新編国歌大観』本文から、『日国』不載語彙を掲示するものである（注3）。なお、これは私の読書中に偶然気づいたものを（定期的な）まとめて示しているものであり、この目的で『新編国歌大観』本文の悉皆調査を

行っているわけではない。

見出し語形は『日国』と異なり、歴史的仮名遣いで表示した。用例は、『新編国歌大観』の本文のままこれを掲示し、出典は、次のように記した。

（四29為忠後・四三九）

「四29為忠後」は、『新編国歌大観』の巻数（第四巻）・歌集番号（第二九）・歌集略号（為忠後）を、中点の後の「四三九」は歌番号を示す。第三節の「『日国』の初出年を遡る」には、

（三60保憲女（993-998頃）一〇九詞書）

のように、『日国』の示す成立年を添えた（『日国』に掲示がないと思われる文献の場合は「七12為信へ為信は985出

家・一一七詞書」のように、二重山括弧で私におよその成立年を示した。

一 『日国』不載語彙

▽ア行

【あけげしき（明気色）】（名）夜が明ける様子。「十六日、御庚申せさせたまふ、月いとをかくてよのふくるまみにみゆ、ふかきよの月といふことをだいにてよませ給ふほどに、あけげしきになれば、御」（三76大斎前・三二八詞書）

【あさとびらき（朝戸開）】（名）「早朝に神殿の扉を開く儀式」（『為忠家後度百首全釈』）。「うづききてあさとびらきはけふなれどなほしらやまのゆきふかきかな」（四29為忠後・四三九）

【あばれ（荒）】（名）（建物などの）破損した箇所。荒れ果てた所。「ひとりぬるねやのいたまのあはれよりさしきてやどる月のかげかな」（四29為忠後・四二八）

【いささ】（副）少し。「いささゑする（＝怨ずる）事ありて」（三73和泉集・二〇〇詞書）

【いざふ（誘）】「いざなう（誘）」に同じ。「朝に來り夕に來りていざふとも不可出、と云ひて將に不隨」（十189蒙求平・一二詞書）

【いはひを（岩氷魚）】（名）岩の陰にいる氷魚。「また、いはひをとりて」（七12為信・一一七詞書）

【いはまく（岩巻）】（自カ四）水が岩を巻くように流れる、の意か。「うはごほりとくるなるべし山がはのいはまくしみづおとまざるなり」（七21重之子・二）

【うつろふ（移）】（自ハ下二）「うつろう（移）」（自ハ四）に同じ。「ものもいはでながめぞおくる山ぶきのいろにころぞうつろへぬらし」（七13元輔☆・六四）

【うはば（上羽）】（名）羽の表面。外側の羽。「ぬれぬれもなほかりゆかむはしたかのうはばのゆきをうちらはらひつづ」（二5金葉二・二八一、金葉三・二九四）

【うへば（上羽）】（名）「うはば（上羽）」に同じ。「たけにふすねぐらのすずめけがへしてうへはにゆきのふりにけるかな」（四29為忠後・四六六）

【えやごゑ（一聲）】（名）「えんや」という掛け声。「まつらぶねみえゆくほどはそれながらただえやごゑのききぞ

たえぬる」(五162広田合・六五)

【おほごころ(大心)】(名) おおよその意味。大意。「なにごそありけれといへる心ぞいともごころえられ侍らねどおほごころはみえて侍るべし」(五162広田合・一四五判詞)

▽カ行

【かくらくの】(枕) 「初瀬」に係る枕詞。室町時代以降の語。「こもりくの」の誤用から出たものか。「三輪山は時雨ふるらしかくらくの初瀬のひばら雲かかるみゆ」(一19新拾遺・五六六)

【かげなびく】(枕) 「夏」に係る枕詞。「かげなびくなつはきにけりあしひきのやまとなでしこいまやさくらむ」(三59千穎・二〇〇)

【かたさむ(片寒)】(形動ナリ) なんとなく寒い。「秋はてて冬こそちかく成りぬらし身のかたさむにおもほゆるかな」(七29定頼・二二九)

【かたさら(片去)】(形動ナリ) 一方に寄っている状態であるの意か。「風はやみふきあげのはまのかたさらに思ふこころにくらべても見む」(三67実方・二五六)

【かたみなせ】(形動ナリ) 語義未詳。「ももぐさのはなのひもをやときはてぬかたみなせにもみゆるのべかな」(三119教長・三七二)、「ひとへやまはつかにみゆる月かげのいづるこころぞかたみなせなる」(四29為忠後・三五二)、「おほつかないかにしづるる空なればうらこの山のかたみなせなる」(五141内大元・二二)

【かみまふ(神舞)】(自ハ四) 神女の舞を舞う。「かみまひしをとめにいかでさかきばのかはらぬいろとしらせてしかな」(三67実方・八四)

【きさりよる】(自ラ四) 語義未詳。「すすみいでてひさごばなとるすまひをさのつきづきしくもきさりよるかな」(四29為忠後・七三五)

【げすし(下種)】(形ク) 「げすし(下種)」(形シク) に同じ(注4)。「かしこきはたかき人となり、をさなきはげすきみとさだめける」(三60保憲女・序)

【ことさかし】(形動ナリ) 語義未詳。「言賢し」で、こざかしいことを言うさまか。「なびかすところさかしなる花薄風にみだるるをりぞおほかる」(七29定頼・二九八)【こゆみづ(肥水)】(名) 肥料となる水。こえ。「はるたた

ばまづまろうゑじこゆみづのえずはさはあしさてややみ
なん」(三58好忠・五七三)

【こるつゆの】(枕)「冬」に係る枕詞。「こるつゆのふゆの
よなよなをしぞなくはらふばかりにしもやおくらむ」(三
59千穎・四五)

▽サ行

【さしごと】(形動ナリ)表現に工夫がないさま。「すこし
さし事にぞきこゆれども、右歌は、ゆきかへるらん心の
その人はしのぶのさとにありけりといふにや」(五143内
大二・六三判詞)

【さらと(更)】(副)「さらなり」の副詞形か。いうまでも
ない。もちろん。「むかし人むべもいひけんことを思ふ心
のやみはさらとなりけり」(三108基俊・一一七)

【さるくさり(猿鎖)】(名)「猿が手をつなぎあって、鎖の
ようにつながっている様をいうか」(『為忠家初度百首全
釈』。「しひしばやこずゑにすぎるさるくさりたえぬ山
べやよをわたるはし」(四28為忠初・六七〇)

【しづみみち(沈道)】(名)地獄に落ちて行く道か。「こい

るざしふかくおりつるふちなればしづみみちさへうかぶ
なるらん」(七12為信・一五二)

【じゅじやう(従上)】(名)「従n位下」から「従n位上」
に加階すること。「四位従上して侍りしに」(四11隆信・
三三二詞書)

【しらたまづき(白玉梓)】(名)返事のない手紙か。「君が
ためわれこそはひとなりはてめしら玉章ややけどかひな
し」(三19貫之・六六七)

【せきもる(塞守)】(他ラ四)塞き留める。「すぐるひをせ
きもるとしもなかりけり人めもる身ぞわびしかりける」
(三33能宣・三五二)

【そそふく(一吹)】(自カ四)そそよと吹く。「をぎのは
に風のそそふく夏しもぞ秋ならなくに哀なりける」(二
10続詞花・一四四)

【そらもの(空物)】(名)大空の下でさらされた物か。
「おほそらもの大空者(≡浮気者)」の意を掛けるか。「そら物はあめに
ぬれぬれ我が袖のかぜにみながらかわかぬやなぞ」(三
73和泉集・五八七)

▽タ行

【たくはへもの（貯物）】（名）大切にしまっておく物。「にほふかをたくはへものにしたるかなかたえやつまにさすむめにより」（三56 惠慶・四七）

【たなゐる（棚居）】（他ワ下二）たなあげにする、留保する、の意か。「あふことをたなゐるきみをいはの上にかせてみるはひさしかりけり」（三65 相如・五八）

【たのき】（名）田の畦の傍らにあるたまり水。「おしねほすたのきにかよるますらをの心もとなき身をいかにせむ」（三106 散木・一四二三）、「たのきといふは、田のあぜのかたはらにある、たまり水なり」（俊頼髓脳）

【たるひまの】（枕）「朝」に係る枕詞。「たるひまのあさなあさなにこがらしぞみねのをちまでなべてふくらし」（三59 千穎・三九）

【たわぶれし（戯）】（形シク）（名詞）「たわぶれ（戯）」の形容詞化）ふざけている。「左申云、右むげにたはぶれしくや」（五175 六百番・六二六判詞）

【たを】（形動）「たおやか」に同じ。「露むすぶもとあらの萩もすゑたをに成りゆく秋もちかづきにけり」（三49 海

人・二〇）

【たをけし】（形ク）「たおやけし」に同じか。「かるかやみだれずは、なにをかはたをけきなをばのこさむ」（三60 保憲女・序）

【ちはやぐさ（千早草）】（枕）「斎垣」に係る。「ちはやぐさいがきのほかは神な月そでにしづえもひまのなきかな」（三76 大斎前・一七九）

【つかる（尽）】（自ラ下二）「尽きる（尽く）」に同じ。「昨日のいのちもうせ、けふのいのちもつかれて、後世にちかづきゆくこと」（十10 法門百・八三左注）

【つぶぎれ（粒切）】（形動ナリ）粒のように切れ切れであるさま。細切れであるさま。「左歌、なるとのうらにみつしほのおと、といへるむげにつぶぎれににほひなくおぼえはべるに」（五146 関白保・五五判詞）

【つめげ（詰）】（形動ナリ）窮屈そうである。「なすものはといへる、つめげにみえ侍り」（五141 内大元・二九判詞）

【てんじやうばん（殿上番）】（名）未詳。輪番制の殿上人としての勤めをいうか。「二条院御時、殿上番かきたりとて、しはすの廿日あまりにめしこめられにけり」（三115

清輔・四一二詞書

【とだゆ（跡絶・途絶・杜絶）】（他ヤ下二）（注5）遮る。

絶えさせる。「かげさえて月のやどかるましみづはなつ
をとだゆるすずみなりけり」（七76露色・一八）

【とびむる（飛群）】（自ラ下二）「むれとぶ」に同じ。「な
みちには跡もさだめずとびむれていそべにかへる友ちど
りかな」（七112蓮愉・三六二）

【とほやか（遠）】（形動）いかにも遠いさま。「とほやかに
ていらへし侍るに」（三99康資母・八一詞書）

【とまごも（苦薦）】（名）小屋・船などをおおって雨露を
防ぐために用いるむしろ。「さみだれのなほふるとのみ
よるふねはふくとまごももくちはてぬべし」（四28為忠
初・二一六）

【ともぐま（友熊）】（名）「何頭かで群れをなしている熊の
意か」（『為忠家後度百首全釈』）。「ふるゆきにみねのと
もぐまいりぬらしくちきのそまのまきのうつぽに」（四
29為忠後・四九五）

▽ナ行

【なごりなく（名残鳴）】（自力カ四）余韻を響かせるように

鳴く。「うたたねの夢にききなす郭公うつつの空になご
りなくなり」（三117頼政・一三七）、「軒ちかく一こゑはし
てほととぎすをちのこずゑになごり鳴くなり」（四2守
覚・三五）

【なだらぐ】（自ガ・活用型未詳）なだらかになる。「され
どもじづかひなどのいますこしなだらぎたれば、かつと
定め申す」（五148摂政合・一判詞）

【なみしなふ】（枕）「海人」に係る枕詞。「なみしなふあま
をとめごをこゆるぎのいそのたまもからむとぞ思ふ」
（三59千頼・一〇）

【ならしたつ（均立）】（他タ下二）「すっかり元通りにする」
の意か。「ふちのはなさきにしはるもすぎはててさみだ
れならしたつぞわびしき」（三33能宣・三〇〇）

▽ハ行

【はがかり（葉懸）】（名）「葉の茂っている懸の木の意」（『為
忠家後度百首全釈』）。「懸の木」は蹴鞠をする場所に植
えた木（『日国』「かかり（掛・懸・係・繫）」（14参照）。

「しづえまでこしげきにはのはがかりはおちくるまりの
みえずも有るかな」(四29為忠後・六八七)(注6)

【はぐる(端黒)】(名)「つまぐる(端黒・棲黒)」に同じ
か。「はらへどもかつふるゆきにたび人ののはぐろのゐが
さかくろひにけり」(四29為忠後・四六〇)

【はさら】(名) 語義未詳。「あつかたてはさらとりすゑや
かつかみまつるうづきにはやなりぬとか」(四29為忠後・
七〇七)

【はながり(花狩)】(名) 花見。「はながりとことづけにこ
そしをりつれこれよりおくはしるしよしなし」(七76露
色・一四九)

【はなふく(鼻吹)】(自カ四) 怒る。承知しない。「かくれ
の歌とておしてとりたらば、ぬしやはなふかんとおほえ
ぬべきかなとかけり」(五197千五百・二六一六判詞)(注
7)

【はなみごころ(花見心)】(名) 語義未詳。浮ついた気持
ちをいうか。「いはでこそすぐべかりけれなでしこのあ
りやなしやと花み心よ」(三95為中・五)

【ひたくつ】(自カ・活用型未詳)「ひたくち(直口)」の動

詞化か。「又、すゑのうれしきも、ひたくちてよろこびた
り」(五143内大ニ・三七判詞)

【ひとときざくら(一本桜)】(名) 一本だけ立っている桜。
「めづらしくみれどもあかぬまつばらやみどりがなかの
ひとときざくらは」(四29為忠後・九四)

【ひとしむ(等・斉)】(自マ四) ひとしくなる。「ひとしま
んとおもひも見えぬ世にあれば末にさこそはおほぬさの
そら」(三125山家・一五一〇)

【ひまとく(隙解)】(自カ四) 氷が解けて割れ目ができる。
「ときしるみはるこちかぜのたゆたふにさはべのこほり
けふやひまとく」(三33能宣・四〇七)

【ひんがしくに(東国)】(名) 「東国」を訓読した語。「ひ
むがしくににわかるるひとにおくる」(三12躬恒・一九九
詞書、同・二三七詞書)

【ふたつらぬき(二貫)】(名) 二つの物が貫き通されるこ
と。「あやしくもひともと菊に露たまのふたつらぬきに
成りにけるかな」(七25匡衡・三)

▽マ行

【まちはかる（待謀）】（他ラ四）まるめ込んで自分の側に引き入れようと待ち受けるの意か。「たちなほりまちはかりけるむつごとにねたくも袖をとりゆるべつる」（三16 林葉・八八一）、「うちとけてなかぞらにすむつきかげをまちはかりけるしのためぞうき」（四29 為忠後・三七六）、「こはぎはらのだつひばりのしりとひにまちはかるなつみのおちばよ」（同・七四四）

【まばがけがら（真羽掛柄）】（名）「真羽掛柄」で、真羽を矢羽として付けた矢の意か（『為忠家後度百首全釈』）。「もろびとやまばがけからであづさゆみひくころもでのさえわたるらん」（四29 為忠後・七五五）（注8）

【みづつの（水角）】（名）銀製の角型の容器で、行旅の際に飲食物などを入れて携行したものと（注9）。「うさへくだるに、入道殿の侍従、白かねのみづつのにかきてありし返事に」（三67 実方・二二八 詞書）

【みづぼそち（水熟瓜）】（名）水分を多く含んだ真桑瓜か。「ながれてもかはるのそののみづぼそちなみのみたてるうりとこそみれ」（三33 能宣・四三八）

【みはしのめし（御階―召）】（名）「節会の開始に当り、内

侍が紫宸殿の東階上に臨んで、承明門外に待期する諸臣をさしまねき、召し入れる事」（『風雅和歌集全注釈』）。

「雲のうへのとよのあかりにたちいでて御はしのめしに月をみしかな」（二17 風雅・八八一）

【むかしよ（昔世）】（名）「むかしの世」②に同じ。「むかしよしらまほしく」（三92 成尋母・二九 詞書）

【むかつら（向面）】（名）向かって正面の方角、場所。「むかつらのはたのかこひのうの花やしづのさらせてづくりのぬの」（四28 為忠初・一七四）（注10）

【もちあまる（持余）】（他ラ四）「もてあます（持余）」に同じ。「身をもちあまりて、おいのふくろこしにあまりて」（三60 保憲女・序）

【もちひびと（用人）】（名）使用人。「わうばうごとするに、かどのもちひ人にさへ、かしひにいださせ給ふ」（三65 相如・六一の次の歌（歌欠）の詞書）

【ものかた（物形）】（名）物の形を描いた絵。図案。「明けぬれば、人のいそぐとありしものかたみるとて」（三74 和泉統・五九〇 詞書）

▽ヤ行

【やはよのかみ（八百万神）】（名）「やおよろずがみ（八百万神）」に同じ。「君がためやはよのかみをかけつつもなほすぢごとにいのらるるかな」（三67実方・二九二）

【やまいだし（山出）】（名）「やまだし（山出）」に同じ。

「みやぎひくくちきのそまのやまいだしゆききえばとやおもひたつらん」（四29為忠後・四九六）

【ゆきかへりぢ（行帰路・往還路）】（名）往還する道。「春秋のゆきかへりぢもしらなくになにをしるしにとしをかぞへむ」（三71高遠・二七三）

【ゆふひやけ（夕日焼）】（名）「夕焼け」に同じ。「六月にゆふ日やけのして侍りけるを見ややりて」（七10中務・一

六〇詞書）（注11）

【ようつかた（夜方）】（名）「ようさりつかた（夜去方）」の略。夜になる頃。「四日のようつかた、はるさめふりそむるころを」（三76大斎前・二六詞書）

【よがれせず（夜離）】 每晚欠かさず。「あきくればよがれせずみるかひもなくかたはれもてくありあけの月」（四29為忠後・三七九）

【よこねしま】「よそねしま」に同じ。「よこねしま下ばに

生ふるさがり苔露かからねどかるる世もなし」（四26堀河百・一三三八）

【よりけびぬし（寄検非違使）】（名）未詳。「仁治三年大嘗会の寄検非違使つとめ侍りてかへりけるみちにてよみ侍りける」（六13新和歌・八一二詞書）、「仁治三年大嘗会の、よりけんびぬしつとめ侍りてよめりける」（七87時朝・一三〇詞書）（注12）

▽ワ行

【わきば（分葉）】（名）「はわけ（葉分）」に同じ。「あさわきのささのわき葉にかけそへて露もおろかに君をおもはず」（七25匡衡・六四）

【ゑごゑ（笑声）】（名）笑い声。「ふりたててわらふゑごゑは秋過ぎてまだ鈴虫の鳴くかとぞきく」（七29定頼・三九六）

二 『日国』に語義記述がないもの

【かす（貸）】 七夕の織女祭に布などを供えて祭る。「織女

にかしつる糸の打ちはへて年のをながくこひやわたらむ」(一古今・一八〇)

【くもかぜ(雲風)】風になびいている雲。「雲風を空になびけて四方に立つ春や世をしるあるじなるらん」(八10 草根・四八)

【けがへ(毛替)】「はがえ(羽替)」に同じ。「たけにふすねぐらのすずめけがへしてうへはにゆきのふりにけるかな」(四29為忠後・四六六)

【しじく(躰)】(自カ下二)髪がほつれる。「わぎもこが額の髪やしじくらむあやしく袖にすみのつくかな」(五291俊頼髓・二五一)

【たわかみ(櫛髪)】(名)「たわ(櫛)」②のついた髪。「ひとなみにしづのたばかみうちらはひみなもろかづらけふはしてけり」(四29為忠後・七一六)(注13)

【とまへ(戸前)】(名)戸の前。「ふたらの山やしろあるとまへに、たび人おほくゆく、月いでたり」(三33能宣・四八〇詞書)

【など(何)】(副)どのように。「うちふさむことはものうしなどせまし夜とぶ雁のおとせざりせば」(三74和泉続・

六三一)

【なにの(何)】(連語)どうして。「なりもいでぬこの身と思ふになにのゐて月日にそへてうみをよむらん」(三106 散木・一四二一)

【にはまり(庭鞠)】「懸の木がない庭での蹴鞠の意」(『為忠家後度百首全釈』)。「ひとはみなたちいづるものをにはまりのかかるかたなきみをいかにせん」(四29為忠後・六八八)、「にはまりにたちならぶかなはなざかりこのした風はちるがをしさに」(同・六九二)(注14)

【にほふ(匂)】ほのかに気配を見せる(注15)。「いましはやまたるる月ぞにほふらしむら雲しろき山のはの空」(一17風雅・五八四)

【ひきり(火鑽・燧)】(名)「ひきりの餅」の略。「火きりとて、近江より貢御にまゐらするもちひは」(三11山頭輔・六九詞書)

【ふとくい(不得意)】(名)親しくないこと。また、その人。「こうばいをしろくよめる、不とくいの人のおまたまじれるによりて成るべし」(三33能宣・四二三左注)

【ゆらく(揺)】(自ガ四)「一玉の緒」の形で、延びる。

「しづかなる心をもてば時うつりことかさなりてゆらく玉のを（歌題「心静延寿」）（八10草根・一〇二五七）（注16）

【をどりあがる（踊上）】（自ラ四）「とびあがる（飛上）」

③に同じ。「さては一日御百首をまかりあづかり候ひて少少しるし申すべきよし、仰をかうぶり候しよりをどりあがり候て、あさましく、心詞もおよばず、ただ老の涙のみこぼれ候なり」（十20土御百・家隆卿中院へまゐらする御ふみ）

三 『日国』の初出年を遡る

【あせはじき（汗弾・汗衫）】（名）夏季に用いる汗取りの一種。*玉塵抄（1563）↓「ある人のつぼねのまへに、あせはじきをかけてありけるをみて、すけただがよみける」（三67実方（998頃）二九〇詞書）

【あをやぐ（青一）】（自ガ四）草木が青々と色づく。茂った葉の色が鮮やかに見える。*俳諧・猿蓑（1681）↓「やなぎのいとみどりみだれて、にはのおもてあをやぎなせり」（三60保憲女（993-998頃）二〇九詞書）

【いつ（何時）】（副）「いつか（何時—）」「いつしか（何時—）」の略。*俳諧・訂正蒼虬翁句集（1847）↓「あづさ弓春のみ空にいつなれてやがて霞の立ちかさぬらん」五228宝治合（1247）七）

【うなぬこ（髻髪子・髻兒）】（名）②鳥「ほととぎす（杜鵑）」の異名。*俳諧・御傘（1651）↓「ゆめさめておもひふしみのさよなかにみにしむものはうなぬこがこゑ」（歌題「寢寐時鳥」（四29為忠後（1136頃）一八一）

【うはなみ】（名）水面に立つ波。*江帥集（1111頃）↓「おほろけのふちやはさわぐ山川のあさきせにこそうはなみはたて」（二4古今六帖（976-987頃）一七三二）

【おきふるし（置旧）】（名）品物などをあまり長くとおいたために、古くなったこと。また、そのもの。*日葡辞書（1603-04）↓「秋の露おきふるしなるくさまくらこよひはたびにあかすべきかな」（三33能宣（984-991）三七八）

【おそれむ（恐）】（他マ四）②かしこまる。おそれおおく思う。*人情本・貞操婦女八賢誌（183448頃）↓「たのみつつおそれみあふぐ我が方になびかざらめや神のゆふ

しで」(五43竹むき(1349)四〇)

【かぜけ(風気)】(名)①(風邪気)「かざけ(風気)①」に同じ。*源平盛衰記(14C前)↓「そのよ、左衛門のかみ、かぜけとてまゐり給はざりしに」(三124殷大輔へ殷富門院大輔は？-1200?)≫一八詞書

【かたかぜ(片風)】(名)さつと吹き過ぎる風をいうか。

*俳諧・曠野(1689)↓「九月つごもりがた、人もろともにてたるに、かたかぜのすぎてさむかりしかば」(七29定頼(1053頃)二二九詞書)

【きいろも(黄衣)】(名)黄色に染めた僧衣。下級僧侶の衣。*仮名草子・尤双紙(1632)↓「秋ぎりのたちぬるすがら心あてに色なき風のき衣にしむ」(二16夫木(1310頃)一五五七三。作者は好忠)

【かざま(風間)】(名)③風の通るすきま。風穴(かざあな)。*浄瑠璃・一谷嫩軍記(1751)↓「のわきしてまよひしこすのかざまよりいりにしころきみはしるかも」(四29為忠後(1136頃)五八五)

【さぬる(一濡)】(自ラ下二)「ぬ」は接頭語。濡れる。

*初学和歌式(1696)↓「月清みあけのの原の夕露にさ

さめ分けくるころもさぬれぬ」(四26堀河百(1105-06頃)一三九九)

【せばし(狭)】(形シク)(注17)「山ざとの笈の水のせばしきに猶有明の月ぞやどれる」(四26堀河百(1105-06頃)一二八五)、「みさごゐる磯まにおふる松のねのせばしくみゆる世にも有るかな」(同・一三〇四)

【たふ(答)】(名)こたえ。返事。*めぐりあひ・二葉亭四迷訳(1888-89)↓「たふなきはくるしきものとならして人のうへをば思ひしらなん」(三80公任(1044頃)五四一)(注18)

【つぐら】(名)③腰掛の一種か。また曲物(まげもの)をいう武蔵・相模の方言という。*随筆・松屋筆記(1818頃)↓「やまざとのつぐらのうへにしりかけておしねこくまにあめぞふりぬる」(七43行宗(1140頃)三二一五)

【つむ(詰)】(他マ下二)②③対処できないような状況に追い込む。ゆきづまらせる。*米沢本沙石集(1823)↓「たよりの風なくして、かずの日を(＝多クノ日ヲ)つめらる」(三92成尋母(1073頃)一四二詞書)

【つりざを(釣竿)】(名)魚を釣るのに用いる竹、または

炭素・ガラス繊維製の竿。*兵範記・仁平二年(1152)

↓「いさりするあまのつりさ^さをさしはへてたのむかひなきめをもみるかな」(三三能宣(984-991)二二三)

【とびあがる(飛上)】(自ラ五(四))③特に、ひじょうに驚いたり、喜んだりしたときなどに、思わずとびはねる。

*真景累ヶ淵(1869頃)↓「心のおろかさは思ひもわき候はで、こはたぞたとどり候程に、この雲のうへに

とびあがり候(注19)」「十土御百(1216)定家卿返事)ぬれいろ(濡色)】(名)水に濡れた色。*仁安元年中宮

亮重家歌合(1166)↓「いとひつるあめもはれぬないぎけさはまだぬれ色ののべの花見に」(三95為仲(1085頃)

九二)

【のやどり(野宿)】(名)「のじゆく(野宿)」に同じ。*

大唐西域記長寛元年点(1163)↓「野やどりせるたび人」(三19貫之(945頃)・四五五詞書)

【ばえ(栄・映)】(語素)動詞の連用形に付けて、そうすることによって引き立つこと、そうしたときのみことなさまの意を表わす。*人情本・春色梅美婦欄(841-92頃)↓「わかわかとなりばえしてもみゆるかなくひぜにもと

はまことなりけり」(三106散木(1128頃)一四〇一)△詞

書「おいたる人のよききぬどもをきてわかやぐをみて」▽

【ひがら(日柄・日子・日次)】(名)③一定の期間。また、日数。月日。*読本・椿説弓張月(1807-11)↓「いとど

しく老はそふともゆきかへるひがらはしばしみじからなん」(三66為頼(10C後か)四二)

【ひとさき(人先)】(名)他の人より先に立つこと。他の人より先になること。*芳野本義経記(室町中か)↓「ひとさきにわがうちつくるあらをだのたのみむなくゆめ

なすなかみ」(三33能宣(984-991)三二三)【ひととほり(一通)】(名)一度通ること。さつと通り過ぎること。*竹むきが記(1349)↓「風わたる軒ばの山

のかしは木にただひととほりふるあられかな」(七112蓮

愉△1293-1298頃か▽三七三)【ふかむ(深)】(自マ四)深くなる。深まる。*うけと

り(後に「初恋」と改題)(1933)(木山捷平)↓「もみぢばのながれてゆけば山がはのあさきせだにもあきはふ

かみぬ」(五3是貞合(893)六八)【まがよふ(紛)】(自ハ四)ものにまぎれた状態である。

はつきりしないさまである。＊山家集（12 C 後）↓「ちるがうへにちりもまがよふ桜花かくしてこそは春も過ぎしか」（三九貫之（935頃）八一七）

【やむら（家群）】（名）家々のむれ。家の集まり。＊林泉集（1016）↓「卯花のさかりなりけりしのむらややむらにさらすぬのとみつるは」（四二八為忠初（1134頃か）一七一）

【よくも（善ー）】（副）「よく（善）」を強めていう。心外な気持、非難をこめていうことが多い。よくまあ。よくぞ。＊浄瑠璃・源平武将論（1662）↓「さりとともとおもふころにはかられてよくも今日までいけるわがみか」（二一八敦忠《敦忠は906-943》五一）

注

（1）拙稿「中世王朝物語語中の『日本国語大辞典』不載語彙——『風葉集』不載の十一作品から——」『岐阜聖徳学園大学紀要』五一、二〇一二年。

（2）前稿については、「このように『日本国語大辞典』不載語彙」とでも明記して論文化しなければ、古語の辞書の見出

し語は増えて行かないのではないかと感じた。」（櫻井豪人「二〇一二年・二〇一三年における日本語学界の展望 語彙（史的研究）」『日本語の研究』一〇—三、二〇一四年）と評された。

（3）なお、本稿で用いた資料のうち、『丹後守為忠百首（為忠家初度百首）』と『木工権頭為忠百首（為忠家後度百首）』は、特異な語彙が特に多いことで知られており、当然ここから多くの挙例が生じた。この挙例と語釈については、家永香織『為忠家初度百首全釈』、同『為忠家後度百首全釈』の注解に教えられることが甚大であったので、特に記して感謝申し上げる。

（4）「げすし（下種）」（形シク）および「げすい（下種）」（形口）は立項されていて、前者は「塵袋（1264-88頃）」以下の用例が、後者は「洒落本・美地の蛸殻（1779）」以下の用例が掲げられている。

（5）自動詞「とだえる（とだゆ）」は立項。

（6）家永香織『為忠家後度百首全釈』に「尊経閣文庫蔵『蹴鞠口伝集』（葉懸に入鞠の事）に「葉懸に入て見えぬ鞠ハ、木の枝の垂る方にゆきて待つべし」とあり、為忠の詠んだのは実際に見られる情景であることがわかる」とある。

(7) 「はなふく(噓)」は立項されている。大治元年八月忠通歌合(二五八)には、「よしかくれの歌なりとて、おしとりたらば、ぬしやはなむかんとおぼえさふらふかな」(五四八撰政合・一九判詞)とある。

(8) 家永香織『為忠家後度百首全釈』に「時代はかなり下るが室町時代成立の『就弓馬儀大概聞書』に「笠懸がら」「犬射がら」という語が見え、これらは笠懸に用いる矢、犬追物に用いる矢の意と思われる。ここから「真羽掛柄」の意味を類推した。」という。なお、そうすると「まばがけからで」の「で」が手段を表す格助詞「で」ということになり、これも古典和歌では珍しい例となる。

(9) 竹鼻續説(『実方集注釈』に添付された「訂正」別紙による)。「みづつの」は、つの型の容器で、行旅の際に飲食物などをいれて携行したものである。参考「砂金五十両、納銀水角」(小右記・長和四年四月二十二日)という。

(10) 『日国』は「むがつら」は空見出しで、「↓むこうづら」とする。「むこうづら」③がこの語義で、举例は「歌舞伎・暫(1714)」。

(11) 「夕焼け」の『日国』初例は、「俳諧・藁人形(1704)」。

(12) 「よせけびいし(寄検非違使)」は立項あり、「中世、寺社

領に寄せ置かれた検非違使。領内の犯罪人の引渡しなどにあたり、俸祿は当該寺社から給与されていた。」という語釈がある。

(13) 「新編国歌大観」は「たばかみ」とするが、家永香織『為忠家後度百首全釈』に従ってこれを「たわかみ(髻髪)」と読む。

(14) 「にわまり(庭鞠)」について『日国』は「庭などとする蹴鞠の遊び」とするが、家永香織『為忠家後度百首全釈』の語釈の通り「懸の木がない庭での蹴鞠の意」とすべきであろう。

(15) プランチ⑨には「何となくそれらしい気配が感じられる。あまりよくないことについていう。」「どうやらにおつてきた」とある。

(16) 「ゆらぐ玉の緒と詠める、ゆらぐはしばらくといへることばなり。玉の緒とは命といへる事なり。されば…しばらくの命なむのびぬると詠めるなり。」(俊頼髄腦)

(17) 「せばし(狭)」「形シク」↓せばい(狭)とあるが、「せばい(狭)」には「文せばし(形ク)」とあって、ク活用の例しか揭示されていないので、ここにシク活用の例を示した。

(18) 「何事もこたへぬことと習ひにし人としるるとふや誰

そも」に對する返歌。

(19) この百首歌は誰の作だろうと思つて読んでいくと、九六番「懷旧」題の「秋の色をおくりむかへて雲のうへになれにし月も物わすれすな」に至つて土御門院御製であることに氣付いて驚倒した、の意。